

I. 学校教育目標

『自文化理解を基盤とした多文化共生の学校づくり』

—自尊感情を育み、持続可能な社会をリードする確かな学力と豊かな感性を育む—

2. 研究主題

生きてはたらく力を培う主体的な学びの創造 —育成したい資質・能力を明確にした授業改善の取組—

3. 主題設定の理由

研究主題設定の理由として次の3点を挙げる。

(1) 学校教育目標

本校には、12の国や地域の外国籍もしくは外国につながる子どもたちが在籍しており、その数は全校児童の50パーセント以上に及ぶ。また、ミナミという日本有数の繁華街に立地し、歴史的に見ても豊富な地域教材を抱えている。こうした特色を生かし、学校教育目標に『自文化理解を基盤とした多文化共生の学校づくり』-自尊感情を育み、持続可能な社会をリードする確かな学力と豊かな感性を育む-を掲げ教育活動を推進している。

(2) これまでの研究

本校は、平成27年度より4年間、めざす子ども像を「様々なちがいを超えてつながり、地球的視野に立って主体的に行動する子ども」とし、ESD「持続可能な開発のための教育」についての研究を推進してきた。ESDの実践を軸に教科横断的な視点で教育の内容を組み立て、多文化共生社会の担い手となる児童の資質・能力の育成を図ってきた。この間、本校は、地球規模の諸問題に対処できるような新しい教育内容や手法の開発・発展をめざすユネスコスクールに申請した。そして、認定された現在、2015年に国連サミットで採択されたSDGs(2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた17の大きな目標)の達成をめざすことを通じて、ユネスコ憲章で示された理念を学校現場で継続的に実践しているところである。このようなことから、本校のESDの実践は、上記の図、SDGsの17の大きな目標を掲げ、約5割の国や地域(12ヶ国)につながる児童がいるという特色を生かした教育を推進し、児童が社会に対する希望をいだき、持続可能な社会を築くことにつながる未来を切り拓く力を身に付けるとともに、自らの未来に対する当事者意識を育む学習活動を積み重ねている。



(3) 学力調査等の結果

平成30年度学力調査等の質問紙で「自分の思いや願いを表現することを苦手と感じている」と回答した児童の割合が約5割いることが明らかになった。本校には、外国から編入してきた児童をはじめ、日本語学習支援を行う必要がある児童が数多く在籍している。その中には、児童の発達の特性や教育活動の特性も踏まえて個別に適切な指導・支援を配慮する必要がある児童もいる。4年間のESDの研究の課題の1つを、このような様々な児童の発達段階等に対応すること「情報を取り出すことはできても、そこから自分の思いや考えを表現

することが難しい場合がある。日本語指導担当教員との連携を密に取りながら、よりスマールステップによるワークシートを使用すること等」の解決策をまとめている。

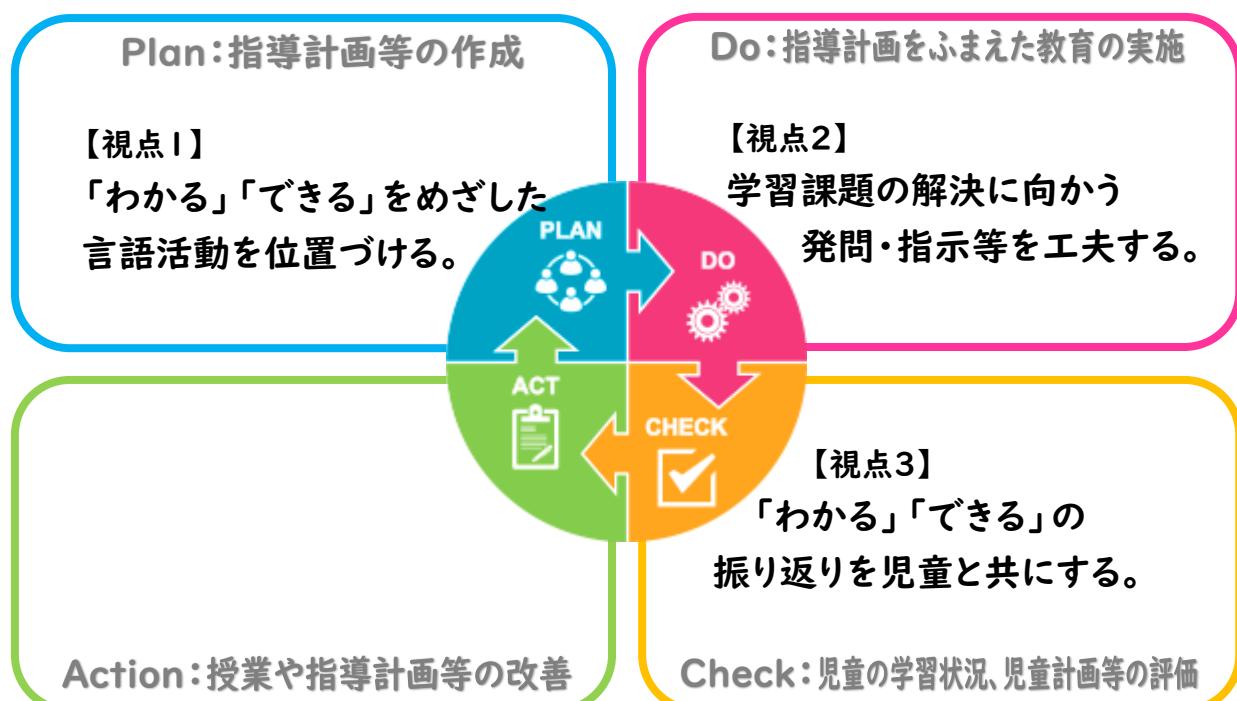
本校の特色を生かした教育を推進し、見えてきた課題を解決することができるよう、以上の3点と教員へのアンケート「自分の思いや願いを表現することを苦手と感じている児童に必要な育成する資質・能力とは何か」を整理し、本研究主題を設定した。

学力調査等の結果を踏まえた教員のアンケートより「学習用語を増やし、知識を概念的に理解する。」「重要語句が分かる。」「文章、図や表を基に自分の考えをまとめる。」等、学習の基盤となる資質・能力である言語能力の育成を図る必要性と方向性が見えてきた。そこで、平成31年度では、各教科等の単元指導計画に「わかる」「できる」をめざした言語活動を位置付け、学習課題の解決に向かう発問・指示等の工夫を各自で行い、約30回も授業を公開し合った。令和2年度は、その成果と課題をふまえ、本研究主題に迫るため、児童の実態を把握し、各学年で【めざす子ども像】を設定した。さらに、国語科を中心としたカリキュラムマネジメントの推進策【学びの地図】を作成し、PDCAサイクルを繰り返し言語活動の充実を図り、言語能力の育成を図るようとした。その結果、「学びの地図」のベースの取組、活用の取組、ESDの取組のPDCAを共有することを通して授業改善を行い、めざす子ども像に迫ったことで、育成したい言語能力の系統が明らかになってきた。また、課題として、以下の3点が明らかとなった。

- (1) 言語能力が身に付いていると自覚できること
- (2) 身に付いた言語能力を効果的に表現できるよう授業改善に努めること
- (3) 自尊感情を高める手立てを講じる必要があること

4. 研究の視点

令和3年度は、これまで明らかとなった成果と課題をふまえ、研究主題に迫るため、次の研究の視点に沿って研究を推進することにした。



5. 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

本校の特色を生かし、教科等横断的な視点で教育活動を組み立て、教育活動全体で生きてはたらく力を培う。そして、各教科等の特性に応じて焦点化した言語活動を教育活動全体で繰り返すことを通して、生きてはたらく力を培っていく。

生きてはたらく力：既習事項を使い、自分のしたことや思ったこと、考えたこと、調べたことを表現すること

(2) 研究の方法

(1) 実態を把握する（学校アンケート、大阪市学力経年調査）

- ・学力経年調査の結果、国語科「話すこと・聞くこと」「書くこと」に課題が見られる。
- ・自分の思いや願いを表現することを苦手と感じている児童の割合が依然として高い。
- ・自尊感情に関わる質問紙項目の割合が低い。



(2) これまでの実践事例や学習指導要領等を読み、実態に応じた指導内容を重点化する。

- ・みなみESDカリキュラムを主軸とした教育課程の編成。
- ・国語科における「自分のしたことや思ったこと、考えたこと、調べたことなどを表現する」資質・能力を育成することを基盤とした教育活動。
- ・自尊感情を高める手立てを教育活動全体で講じる。



(3) 各学年の【めざす子ども像】をもとに、【学びの地図】を作成する。

【めざす子ども像】

低学年 「経験したことを順序に沿って表現できる子」

中学年 「調べたことの中心を明確にして、表現できる子」

高学年 「自分の考えを明確にし、根拠をもとに説得力のある表現ができる子」

【学びの地図】

- ・めざす子ども像に迫るよう言語能力の育成を観点に各教科等の重点単元を言語活動でつなげる。
- ・育成したい言語能力の系統（R2作成）を活用する。



(4) 【学びの地図】の学習活動の中から、公開授業を全員1回以上実施する。

- ・「みなみESDカリキュラム」と教科目標から、各単元の「学びに向かう力 人間性等」を設定する。
- ・PDCAサイクルを繰り返し、言語活動の充実を図り、言語能力を育成する。



(5) 【研究のまとめ】を作成する。

- ・意識調査や診断的な評価・形成的な評価・総括的な評価を基に、公開授業を中心に研究の視点に沿って、成果と課題を明らかにし、研究主題に迫る。

R2年度に引き続き、今年度も新型コロナウィルス感染拡大の状況を鑑み、室内でのグループ活動、ゲストティーチャーとの交流、町たんけんなどの校外活動の実施については、延期や中止を含め必要最小限とする。また、実施する場合についても対面を避けるなど、十分な感染拡大防止対策を講じた上で行うこととする。